ギャラリー・サージという絵画 1998

Michiyoshi DEGUCHI Exhibition

出口道吉 展

16—28,Nov. 1998

GALLERY SURGE

「ギャラリー・サージという絵画 1998」によせて

出口　道吉

アトリエ空間という絵画

1970年代の後半をさかいに、私は自ら筆を手にとって画面にむかう意欲もなくなり、他人の描いた画面にむきあうことさえ苦痛になっていた。それは当時、画面を通じて手応えのある「事物」に至らないことからくる虚脱感を抱いていたこと、仮に「事物」がきわめて具体的に描かれているとしても、「描き手」の体質と臭気をつたえるだけの絵の具による遊戯や、心許ない雰囲気でつくりだされた曖昧な幻影しかみあたらないという不快感を払拭できなかったからである。そしてそれに対する反動が、身辺にある現実の「事物」に直接対面することの集中力を覚醒させる引き金になっていったのだが、ただそれでも、絵画と絵画のモチーフである「事物」との関係には関心を持ちつづけていた。当初はきわめてぼんやりしたものであり、辺りに互いに連関する「事物」が無数に存在するなかで、そのなかの幾つかが人間の意識の網にかかって絵画のモチーフになっているという出来事に漠然とした興味をもっていた。それがしだいに、絵画のなんらかの構造が、自分の目のまえにある現実の「事物」に対面するときの補助的な力になりえることに気付いていったのだが、そのきっかけは、私のアトリエ空間にあった。

アトリエの用具を持ち込んだギャラリー・サージでの制作 1994

あるとき、ながいあいだ放置していた何枚かの描きかけの絵画が、ただ絵の具が付着するだけの板材のようにきわめて物体然として目に映り、アトリエの片隅に埃を被って立つ画架や作業台、照明器具、ハンガーにかかる上着などの物体とまったく等価に認識されたのだった。ここにひとつの思いつきが生まれた。アトリエのなかでキャンバスの配置替えをしたり、作業台や棚のレイアウトを変えたりしながら、それと同じ調子でキャンバスの上に線を引き、絵の具を置くだけの行為をくりかえし試みたのである。つまり、アトリエ空間に在る様々な用具と同様にキャンバスをただの物体とみなし、さらに画面上で色彩と形態をなす絵の具をも物体とみなし、これらすべての物体の位置関係を変えてみるだけのことをくりかえし試みたのである。しかもこのとき一寸した思いつきでアトリエ全体の様子を白黒写真で記録しつづけておいたことが、のちに重要な示唆を私に与えることになった。

あるときふと、その写真を眺めると、写真の四角いフレームのなかにあって、アトリエ空間はひとつの視点によって統一された絵画のようであり、しかもそのアトリエ空間が、其処にある何枚かの描きかけの絵画のモチーフにみえたのである。さらにその記録写真の中身を、現実のアトリエ空間のなかで比較しながら眺めなおしてみるとき、私自身が、写真のアトリエ空間と現実のアトリエ空間とのあいだの時間のなかに居て、其処から眺めるこの写真のなかのアトリエ空間には、此処で自らが絵画と絵画の周辺に関わったという身体的な記憶が残存していて、その記憶の残存が私が現実に目にするアトリエ空間に反映し、アトリエの物体すべてをひとつにし、ある秩序をもつ「アトリエ空間という絵画」とも、「絵画というアトリエ空間」とも認識できる、「もうひとつの「絵画」へと導くものがあるようにみえた。すなわち、絵画からアトリエ空間へ、アトリエ空間から写真のなかのアトリエ空間へと視線が収斂し、そこから再びあらたな意識と想像力が現実のアトリエ空間へと投げ返される。しかも其処には、その意識と想像力を双方に往還させるかのような構造が

あると思えたのである。

この「絵画体験を通じたアトリエ空間という事物の理解」、これを、私以外の第三者においても共有できる形式として成立させる。それがのちの、「ギャラリー・サージという絵画」制作の支柱である。其処には、絵画には「描き手」と鑑賞者を結びつけて、或る対象を身体的・知覚的に共有させることのできる固有な力が内在するという、私なりの推測が背後にあってのことである。

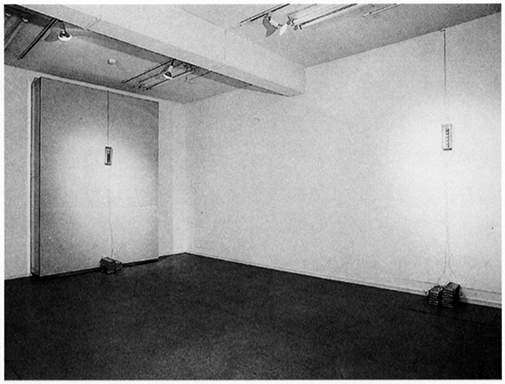
また、ギャラリーで展開するにあたり、ひとつの仮説をたてた。それはもはや、絵画に画面は必要ないだろうということである。画面と「事物」とのあいだの絵画上の必要な構造が情報としてあれば、あとは、その情況のなかに鑑賞者の出番を待てばよいと考えたのである。画面はつねに「描き手」の支配下にあって、鑑賞者の通行を阻むだけの障壁だと思うからである。

「ギャラリー・サージという絵画」の実践

「ギャラリー・サージという絵画」はこれまで、96年と97年の二回にわたり発表し、今回は三回目となる。96年の展示においては、まず94年と95年の8月の一週間ずつを利用し、私のアトリエにある機能をそっくり「ギャラリー空間」へ移すことからはじまった。画架などの用具をはじめ、数十枚の描きかけの絵画を画廊に持ち込んで制作し、その過程を写真で記録した。そして作品公開時に設置したのは、両側面から内側を覗くことのできる木箱に納められた、画面を裏返しにした一個のキャンバスと、展示空間の三箇所に配した、制作の過程をみてとれる小さな白黒の連続写真である。

97年の展示では、公開直前の一週間を制作にあてた。前作との違いは、「ギャラリー空間」の中央に一枚のキャンバスのみを置いて制作したことである。この変化にはひとつの理由があった。前作の記録写真にみる多くのキャンバスや用具が、作者である私の身体と行為を過剰に反映していて、そのことが、鑑賞者と「ギャラリー空間」との直接的な結びつきを疎外しているのでは、という自問があったからである。

公開時に用意したのは、一番奥の壁面に設置した、白いプラスチックボードで画面を塞いだひとつのキャンバスと、やはり数多くの記録写真である。いずれにしても両作品は、ごく少量の道具立てが「ギャラリー空間」という「事物」のなかに置かれて整えられた。それは、可視的な刺激のほとんどない空白の空間にたたずむ鑑賞者にとり、微細な情報に能動的にかかわることが、彼らが其処に居ることを正当化する唯一の理由になると同時に、彼らのむかう相手は「ギャラリー空間」以外のなにものでもないことを示唆することになると考えたからである。



ギャラリー・サージという絵画1996
両脇から覗く事のできる木箱に裏返しで入れた絵画、
制作過程を写した小さな連続写真、ギャラリー空間

ここで重要なのは、連続写真にみる画面の変化と空間とのあいだの抽象的な出来事を目で追いかける時間なのである。写真のフレームのなかでは一枚の画面が変化をくりかえすたびに、周りの空間が影響を受けて違った表情をみせる。これを追う時間、この現実的な時間の流れから少し外れた過去の時間を、実空間で体験することが、重要な要素である。其処には鑑賞者と空間が、目には見えない身体的・知覚的な契約を結ぶことのできる装置が隠されていると考えるからである。

これまでの「ギャラリー・サージという絵画」は、方法的には、私のアトリエ空間での試みをそのまま、ギャラリー・サージの展示空間に移植して公開することを図ったものである。しかしその制作は、おもいがけず多くの発見を与えてくれた。それはけっきょく、私が自らの知覚と感覚をして「事物」に向き合いたいという本来の希望を大いに叶えてくれるものだった。

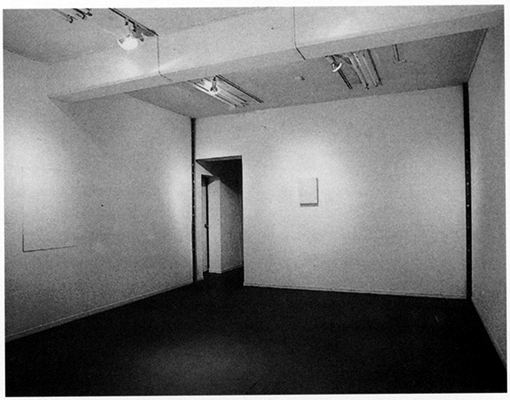
制作は、「ギャラリー空間」のなかで刻々とかたちを変える陽光と陰影に対応させながら画面上に線を引き色彩を配することであり、この様子を絶えず白黒写真で記録することだった。大きなガラスを張った白い箱

とも形容できる「ギャラリー空間」には陽光が射し込み、ゆるやかに拡散し、ときに鮮やかに輪郭を落とす光の溜まりがあった。天井と柱の窪みには形と濃さを変えながら潜む陰影があった。キャンバス上では、絶えず変容するモチーフとしての光と陰影を矩形で切り取り、さらに絵の具という物質で位置づけた。其処で捉えることができたのは、「ギャラリー空間」を構成する物体どうしの微細な振動であり、そして、数多くの画家や彫刻家や鑑賞者らの足跡と、彼らに与えつづけた美術上の意味や抗うべくもない制度、についての追想である。

こうした体験は、おのずとギャラリーと人との関わりに私の目をむかわせたが、その結実がこの度の、「ギャラリー・サージという絵画 1998」である。これまでの「ギャラリー空間」に代わり、ギャラリーの活動機能である、ディレクター・酒井信一と、オーナー・渡辺千恵子の両氏を絵画に関わりをもたせての制作だったが、それはまさに、上述の体験の深度を掘りさげてさらに作品のうえに反映させ、ギャラリー・サージという「事物」の包括的な開示をみたいという狙いがあってのことである。

展示スペースの中程に置いたビニール製の座をもつ簡易椅子は、両氏がモデルになって腰をおろしていたときのものであり、その傍の麻布で包まれたキャンバスは、私の画面上での制作の区切りごとに、両氏が両腕で支えていたものである。また、展示スペースの四隅にある柱状の箱に納められた連続写真は、鑑賞者と、ギャラリーの物と事柄、とを繋ぐ鍵になるはずである。

今回の試みは、両氏が、不特定な鑑賞者の視線を受け入れるというデリケートな葛藤のなかで承諾されたことのうえに成り立っている。制作者として、ふかく感謝するばかりである。



ギャラリー・サージという絵画1997
画面を覆われた絵画、制作過程を写した小さな連続写真、
ギャラリー空間

出口道吉　略歴
1955　兵庫県生まれ

個展
1980 SHOWER 藍画廊（東京）
1981 WINDY SPACE 藍画廊（東京）
1982 WINDY SPACE Gアートギャラリー（東京）コバヤシ画廊（東京）
1983 WINDY SPACE 田村画廊（東京）
1984 SHADOW WORK アポロハウス（アイントホーヘン/オランダ）
デ・カペル（デン・ハーグ/オランダ）
1987 SHADOW WORK 村松画廊（東京）
1988 SHADOW WORK コバヤシ画廊（東京）画廊パレルゴンII（東京）
1989 SHADOW WORK コバヤシ画廊（東京）ギャラリー・サージ（東京）
1990 SHADOW WORK 秋山画廊（東京）ぎゃらりー・ぐばく（埼玉）
1992　絵画の総体 村松画廊（東京）バレンタイン・ギャラリー（長野）
1993　絵画の総体 村松画廊（東京）
1994　絵画の総体 村松画廊（東京）絵画の総体 すどう美術館（東京）
1995　アトリエ 村松画廊（東京）絵画の総体91～92 ギャラリー・サージ（東京）
1996　アトリエ 村松画廊（東京）ギャラリー・サージという絵画 ギャラリー・サージ（東京）「モチーフ達の絵画」推理と想像力のかたち INAXギャラリー（東京）
1997　ギャラリー・サージという絵画 ギャラリー・サージ（東京）
1998　すどう美術館

グループ展
1982　法政大学（東京）
1983　女子美画廊（東京）福生米軍住宅跡地（東京）ギャラリー・αM（東京）
1989　目黒区立区民ギャラリー（東京）大谷地下美術展 89 大谷資料館地下採掘場跡（栃木）
1991　日本・ベルギー現代美術交流展 旧金竜小学校（東京）
サンカントネール歴史博物館（ブリュッセル）
1997　ハーミット・プロジェクト「Nearthe Beginning」プラシ修道院（チェコ）

GALLERY SURGE
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル1F Tel.03-3861-2581 Fax.03-3861-2582
Watanabe Bld.1F,2-7-13,Iwanoto-cho,Chiyodaku,Tokyo 101-0032
http://www.catnet.ne.jp/surge/ e-mail=surge@catnet.ne.jp
協力: ササベ印刷株式会社　〒710-0806 倉敷市西阿知町西原1327　Tel.086-466-1111 Fax.086-466-0456